

都市地理学を解き放つ —環境正義を事例として

Unbounding Urban Geography:
The Example of Environmental Justice
URP G-COE International Colloquium

URP G-COE International Colloquiumが、2009年6月6日(土)に大阪駅前第2ビルのキャンパスポート大阪で開催された。研究発表は、アメリカのミネソタ大学の地理学者エリック・シェパード教授とエルガ・ライトナー教授によって共同で行われた。シェパード教授は、計量的な手法を用いた経済地理研究で、ライトナー教授は移民や都市開発の都市地理研究において注目すべき研究を行ってきた。

「都市地理学を解き放つ--環境正義を事例として」と題された発表は、主にアメリカのミネ



ライトナー教授と質問に応えるシェパード教授

アポリスにおける環境正義の可能性についてであった。環境正義とは、環境被害リスクの不均等な分配状況の是正を目指すものである。そのためには、リスク(例えば、ゴミ焼却場等)の分配状況を把握して、その不均等を是正するべく集団的な声を形成することが鍵となる。

発表の前半では、シェパード教授が、地理情報システム(GIS)を用いて、コミュニティの全体よりも、内部においてこそ環境悪化のリスクが入り組んで分配されていることを可視化した。それによると、リスクはコミュニティの階級や人種のラインに沿ってではなく、それらを横断するかたちで分配されているのである。

後半では、ライトナー教授が、環境問題をめぐる意思決定過程にコミュニティの側からどのような社会的・政治的働きかけが可能なのか、その過程で大学はコミュニティとどのような関係を築けるのかという実践的課題についての説明を行った。さらには、他の機関や人々にも開かれた情報の共有・利用の可能性や、この試みが直面する様々な困難についても指摘がなされた。 << 北川真也 (G-COE博士研究員)

A URP G-COE International Colloquium entitled "Unbinding Urban Geography: The Example of Environmental Justice" was held June 6, 2009 at Campus Port Osaka in the Osaka Station Front Building No. 2. A report was presented by Professors Helga Leitner and Eric Sheppard of the University of Minnesota, USA, on the problem of how the university's knowledge and the community's knowledge can work cooperatively in the process of achieving environmental justice.